
幼馴染　　小さなプレゼント

梓月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幼馴染　小さなプレゼント

【Nコード】

N2997P

【作者名】

梓月

【あらすじ】

インフルエンザになった琴音。
家で二人きり。輝視点の
お話です。幼馴染に続いています。

「大丈夫か、琴音！」
「う……ん」

おれは琴音のお見舞いに来ていた。琴音は苦しそうに寝ている。39・7度の高熱で、もう2日も

この状態だ。あの日の夜、琴音が寝た後、

琴音の母が迎えにきた。おれも車に乗せてもらっ

て病院の検査で遅くなるからと、家まで送ってもらった。

そして次の朝、インフルエンザになったことを

知らされたのだった。おれはいろんなものを

もって見舞いに行った。クラスの皆にも

人気がある琴音だから、たくさんのものを

預かって来て来たのだ。今日は急用で

行かないといけないから父が帰ってくるまで

見ていてほしいと言われた。1時間半

だからおれは分かったといって、今

この状況なのだ。

「輝……ごめ……んね」

「いいから早く寝ろ」

起き上がるうとした琴音をベットに

寝かせ、布団を掛ける。なかなか寝付けないよう

でうつろな目でこちらを見る。

「ねえ輝……お願い……」

「なんだ？」

聞き返した。

「手、握ってていい……？」

あの日のように聞く。

「わかった、ほら」

手を差し出す。あんなかわいい顔で言われて
断る男なんていないだろう。赤くなっているせい
普段以上に可愛い。こんなことを考えていたら

おれの顔は赤くなっていた。

ようやく眠ったようだ。

「おれのほうこそごめんな」

頬にそっと口づけを落とした。

「ひ・・・かる」

「う、うわ」

おれは心臓がとまるほど驚いた。ちゃんとした
キスもしたことがないから、寝てるところを
襲うなんてさ。寝言だったようで

ほっとしたような、がっかりしたような。

おれは変な気持になった。そんなところへ

琴音の父が入ってきた。

「う、うわあ！」

二度目のびっくり。

少し話したあとおれは家に帰った。

今度は起きているときにしたいな・・・

そんなことを思いながら自転車を

こぐのであった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2997p/>

幼馴染　　小さなプレゼント

2010年12月5日00時40分発行